森の詩 Cantum Silvae
貴婦人の十字架
CHAPTER 2

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2015 Yu Yaotome

目次

グランドロンからの教師
白薔薇の苑
森の詩
隠せぬ想い
貴婦人の面影
若き国王
孤独な二人
申し込み
告知
優しい雨

グランドロンからの教師

　日の長さが明らかに夜よりも長くなってきた頃、王太女マリア＝フェリシアには新しい教師が付けられる事になった。グランドロンの言葉、宮廷の作法ならびに歴史に詳しい教師を探していた所、グランドロンの王の教育を担当した当代一の賢者ディミトリオスの門下の者を迎える事が出来たのだった。七十五歳はとうに超えたと言われる賢者の弟子にしてはあまりにも若く見えたので、ザッカは驚いたが、少し話してみれば、何を訊いても的確な答えが帰ってくる。これほどの才を持つ者であれば、なるほど賢者が最後の弟子に選ぶのも納得がいくと思い直した。

「それで、ティオフィロス殿、そなた、歳はいくつになる」

ザッカは訊いた。

「先月、二十六となりました」

　柔らかい栗色の髪と深い海のような瞳を持つ若者は、有名な《氷の宰相》の前にも臆する事がなかった。

「賢者殿にはどのくらいついたのだ」

「私が十になった時に、屋敷に引き取られ、二年前に国を出るまで教えを受けました」

ザッカは多少驚いた。

「賢者殿は、そのように若い者の教育までするのか」

「私が最初で最後でございました。何かと手がかかりましたので、懲りたのでありましょう」

　賢者と十四年も寝食を共にしたとあっては、そこらの学生上がりとは違うはずだ、ザッカは黙って頷いた。

「そなたに期待される役目であるが……」

宰相は髭をしごきながら言った。職を得た事を知った青年は微笑みながらかしこまった。

「期間は三か月、可能な限り多くのグランドロンの知識を伝えていただきたい。学問だけではなく、作法や宮廷で踊られるダンスなど、姫があちらの宮廷でグランドロン人のごとく振る舞えるようにしていただきたい。生徒は二人だ。当然ながらグランドロン国王とのご縁組みが進んでいるマリア＝フェリシア王太女殿下。そしてもう一人は姫の《学友》と呼ばれる女官だ」

「《学友》……。ああ、こちらの宮廷にはその習慣がございましたね」

マックスは頷いた。

　これは、対照的な。これが二人の生徒に対するマックスの最初の印象だった。この二年間、旅をしながら各国の貴族の家庭で教師を勤めてきた彼は、一目で王女が簡単な生徒でない事を見て取った。王女は噂に違わず美しかった。燃え盛る炎のような輝く赤毛に明るい緑の瞳がよく映えた。丸く白い顔にきりっとした小さめの鼻、赤く少し突き出た薄い唇が駄々っ子のようで魅惑的だった。男としてはその顔に魅力を感じても、教師としては手強さを感じた。太い眉や少し尖った顎は、生来の強情さを示している。その瞳の輝きは誰であっても見下し馬鹿にしてきた、王女ならではの傲慢さに満ちていた。

　一方、その後ろに控えるバギュ・グリ侯爵令嬢と紹介された娘の方は、とても令嬢には見えなかった。どこかの、具体的に言えば深く神秘に満ちた《シルヴァ》の森で、何十年も隠遁生活を送ってきた隠者か、戦争と飢饉に苦しむ辺境地からようやく戻ってきた兵士のような、悲しみをたたえた瞳が印象的だった。王女とさほど変わらぬ、質のいい衣装に身

を包んでいるが、色目が全く違った。王太女のドレスは明るい朱の地色にクレマチスの文様が浮かび上がっている。金と緑をねじらせた縁飾りが広く露出したデコルテラインを強調していた。《学友》のドレスは熟成したワインの色だった。わずかに光沢のある綾織りで、細かい菩提樹の葉の柄だった。首の付け根近くまで覆われた丸衿で、肌の露出は最低限だった。しかも彼女は長袖を着ていた。冬の終わりの椎の葉の色をした髪はきっちりと後ろで結わえられ飾りは最小限だった。つまり、こちらの娘は全く華やかさに欠けていた。よく見れば、整った弓形の眉と焦げ茶色の意志の強そうな瞳、そして聡明そうな優しい額など、美しいと判断していい素材を持ち合わせていたが、礼儀正しすぎる程の佇まいが堅く、女性としての魅力はほとんど感じられなかった。二人はほぼ同じ歳だと聞いていたのだが、マックスには十年以上の歳の開きがあるように思えた。

「本日より、特にグランドロンに関する事をご講義いただくティオフィロス先生です」

宮廷奥総取締のベルモント夫人が紹介した時に、マリア＝フェリシア姫はことさら馬鹿にしたような顔になった。

「馬鹿みたい。私と結婚したいならグランドロン王がルーヴランの言葉を憶えればいいじゃない」

ベルモント夫人はコホンと咳をしたが、マックスは全く物怖じせずに答えた。

「我が師の言葉によればレオポルド二世陛下は私以上にルーヴランの言葉をお話しになれるそうですよ。ただ、宮廷の者のレベルはそれほど高くないんです。あちらで王太女殿下が命令をお下しになるおつもりならば、グランドロンの言葉を習われるのは、そう無駄にはならないと思いますね」

部屋にいる姫以外の全ての者は、国の力の差を全く認識していない浅薄な王女がグランドロンでどれほど馬鹿にされるか薄ら寒く思ったが、それを全く感じ取っていない当人は、この教師の言葉に一理を見いだしていた。

マックスは授業を始めるにあたって二人の生徒にグランドロン王国とレオポルド二世に対する印象を訊いた。

「国土は広いけれど、寒かったり辺境が多いんでしょう。殺風景なお城と、軍隊が強いけれど粗野な廷臣たち。違う？」

マリア＝フェリシア姫は容赦がない。マックスは苦笑した。

「ルーヴのお城の華やかで装飾の美しいこと、それに比較するとヴェルドンの城は確かに装飾は少ないことかと思います。ただ殺風景というほどの簡素さでもないのでご安心くださいませ。廷臣の方々も、詩歌やリュートの腕前は存じませんが、殿下の前で醜態は見せないほどには礼儀作法を心得ているものかと思われます」

それからラウラの方を見た。

「バギュ・グリ殿。あなたはどのような印象をお持ちですか」

ラウラは困ったように答えた。

「厳格で、秩序を重んじ、曖昧さを許さないという印象がございます。先の国王陛下も、レオポルド二世陛下も、どちらかというと好戦的であられると伺っていました」

「なるほど。確かに現在のグランドロン王国では、体系だった軍事訓練に非常に力を入れ、さらに新しい技術の開発にも余念はございませんが、とくに他国に対して好戦的ということではないかと思われます。むしろ

守りを強固なものとするために、以前よりも王国内で国王への求心力を高める努力をしているのでしょう。これは国王が多くの廷臣よりも年若いということもあるのでしょうね」
「でも、レオポルド様って、政治なんてそっちのけで、女遊びが尋常じゃないんでしょう？」
姫の質問にマックスはどきりとした。姫だけでなく控えている女官たち、そしてラウラも眉をひそめている。若いご婦人がたには許しがたいことなのであろう。マックスの目は宙を泳いだ。
尋常でないかは別として、グランドロン現国王が何人もの下賤な娘たちを城に呼び騒いでいるという話は、一度ならず聞いたことがあった。それも、噂ではなく、国王の教育責任者をずっと務めているディミトリオスの口からだ。
老師ディミトリオスは若き国王の女遊びに諸手を挙げての賛成ではなかったが、それでもやめさせようとは思っていなかった。
「何故ですか？」
まだ初な少年だったマックスには、それはとても軽はずみで馬鹿げた振舞いに思えた。もしかしたら国王は暗君であるのかと心配すらした。しかし、ディミトリオスは笑った。
「臣下が憂慮すべき事態というのは、そういうものではない。もし、王が宮廷女官の一人に懸想し、その女や親族に地位や領地を与えたりしだしたら、それこそ由々しき問題だ」
レオポルドが呼ばせている女たちは彼の個人的な好みとは関係がなかった。ベフロアという女の仕切る高級娼館が恥ずかしくない程度の口を利ける女たちを適宜選んで派遣しているだけだった。同じ女がくりかえし来る事もなかった。
マックスは旅に出てから女遊びを覚えた。仕事が終わった後には居酒屋に行き、女たちと楽しく恋の駆け引きをする。寝室に連れ込む事に成功し、しばらく短い恋の花を咲かせる。その土地を離れるまでの楽しいゲームだ。だから、国王が女と遊ぼうと特に悪い事だとは思わないようになった。彼は居酒屋には行けないから城に呼んでいるだけだ。
だが、すべての人間がマックスと同じような寛容な意見を持っているわけではない事も彼は知っていた。女性、とくにこれからその男の妻になるやも知れぬ女にとっては、そのような噂は聞き捨てならぬであろう。彼にとってこの際重要なのは、自分の意見でこの話が破談になったりしない事であった。それはとりもなおさず彼自身の失業を意味するから。
「畏れながら、私はその噂の真偽については存じませぬ。少なくとも政を疎かにしてまでということはございますまい。それに、どのように女癖の悪い男であろうと、姫のようにお美しい貴婦人を一目見たが最後、二度とくだらぬ遊びはしなくなるものでございます」
我ながらひどい戯言だ。マックスは心の中で思った。彼はその場にいたもう一人の娘の眉が、悲しげに歪んだ事には氣がつかなかった。

白薔薇の苑

それからマックスはほぼ毎日城へやってきた。城内に住居を用意すると言われたが、わざわざ断り、『カササギの尾』に留まる費用だけを王家に払ってもらうことにした。

王家としてはその事には異存はなかった。サン・マルティヌス広場は王宮から近くいざという時にはいつでも呼び出せたし、『カササギの尾』の一日の滞在費用は王家にとって午餐の一人分にも当たらぬものであったから。王宮では、一日三食の食事が出された。比較的簡素な朝食、それからたっぷりの酒とご馳走のでる昼食と夕食である。スープが出た後、豚肉、羊肉、牛肉、家禽などを二種類から三種類、それぞれ別の調理法で煮たり焼いたり冷製にしたりして合計で九種類ほどの料理として次々と提供する。これに豆類や様々なフルーツなどが加わり、大量のパンとともに提供された。食事時間は二時間以上に及び、マックスには退屈だった。立派な服装で食卓につかなくてはならないのもうんざりだった。

宮廷を一歩出ると、もっと簡素な食事が待っていた。豆や野菜や穀物のごった煮スープや、わずかな肉を干したり刻んだりした食事だ。それに『カササギの尾』には常連としてマウロや親友のジャックが《肉まな板》をよく運んできたので、人びとはこれを楽しんだ。《肉まな板》とは、王宮で肉を切る時のまな板代わりに使われる固いパンで、食事の後には貧民や動物に与えられていたのだ。肉汁をたっぷり吸っているため、肉を食べられない貧しい客たちにも好評だった。

マウロやジャックとは、宮廷でも『カササギの尾』でも、よく顔を合わせた。ジャックは召使いで、主に広間で顔を合わせる事が多かった。もちろん宮廷では「ティオフィロス先生」に召使いが声をかけるなどということは許されないので、目礼をするだけである。馬周りの仕事をしているマウロも同様だ。だが、二人と『カササギの尾』で親しく話をするうちに、マックスはマウロが、バギュ・グリ侯爵令嬢ラウラに使える召使いアニーの兄であることや、そのアニーの親友である姫の召使いエレインとジャックが恋人同士であることも知ることになった。それで、彼は表立っては訊けない姫君の評判や、ラウラの立場についても少しずつ知ることとなったのである。

＊　＊　＊

「ねえ。レオポルド様って、サルのように醜くて、矮人のように背が低いの？」

マリア＝フェリシア姫は、極楽鳥の羽で出来た大きな扇で左右から侍女に風を送らせていた。その妖艶で自信に満ちた笑顔は、明らかに容姿の劣る存在を馬鹿にしている事を示していた。マックスはその言葉の奥に込められた自分の出身国の支配者に対する侮辱に腹を立てたりはしなかった。国力の違いは誰の目にも明らかであるし、容姿にしか興味のない多少資質に問題のある王女が担う予定のこの国の未来にもさほど興味がなかったからだ。

「姫様がお話になっておられるのは、現国王であるレオポルド二世陛下の事ではなく、かのブランシュルーヴ王女と結婚なさったレオポルド一世陛下の事でございますね」

「あら、違うわ。そっちがサルみたいに醜い小男だったのは百も承知よ。私が言いたいのは、なぜ前国王がよりにもよってそんな醜い男と同じ名前を付けたのかってことなの。生まれた時にあまりに醜かったからそうしたのかなって思ったのよ」

いくらか常識を心得ている女官たちはあまりの無礼な物言いにぞっとしたが、マックスがそれに構う様子もなかったのでホッとした。間もなく実現するはずのグランドロンからの使者との謁見で王女が何を言いだすかと思うと彼女たちの心は重くなった。

「前国王陛下は、容姿の事でお名前を付けられたのではないと思われます。現に国王陛下はレオポルド一世陛下の再来と言われるほどに力強く版図を拡大され、国内の事業を勇猛に進められています。その意味で、ブランシュルーヴ王女の再来との評判高き美姫である姫様とは真にお似合いかとお喜び申し上げます」

全世界でかつて存在した事がなく、これからも存在しないであろうと謳われる美女、ブランシュルーヴ王妃と比較するとは我ながらおべっかにも程があると思ったが、姫の方はまんざらではないと思ったらしい。

「じゃあ、そんなにみっともないお姿じゃないと期待していいわけ？」

彼は微笑みながら答えた。

「私めは女性ほどには男性の容姿に興味を持つ方ではありませぬが、わが君主はなかなかの男丈夫かと思われます。背は私よりも頭半分ほど高く、まっすぐ艶やかな長い黒髪をしておられます。大変な自己克己の持ち主でおられ、日々剣の鍛錬も怠られぬため、しっかりとした胸板と肩幅、甲冑を身に着けられたお姿は惚れ惚れするほどでございます。ただし、これは私めの意見、目の肥えられた姫様がご自身で判断なさるとよろしいでしょう」

姫は複雑な顔をしていた。縁談の進んでいる相手が醜いサル同様の容姿でない事は歓迎すべきニュースのように思われたが、そのように屈強で粗野な男が、自分の美しさを本当に理解して大切にするつもりがあるのかどうか不安だったのだ。王の女遊びの噂についても真偽が確かめられていないし、出来る事ならばこの話をどうにかして断りたいと思っていた。その一方で、実際に有名なグランドロン国王に会い、「何と美しい姫君だ」と言わせてみたいとも思うのだった。

マリア＝フェリシア姫が執拗にグランドロン国王の容姿について問いただしている間、側に控えていたラウラは窓の方へと顔を向けていた。彼はその様子に氣がついて、《学友》の娘をそっと観察した。ラウラには容姿がどうこうという以前に、グランドロン王レオポルド二世に対しての不快感があるように見受けられた。

センヴリで働いている時にもそうだったが、グランドロンとその国王に対して好意的に受け止められていることは少なかった。ルーヴランでも、センヴリでも、グランドロンという国は面白みのない冷たい人間の住んでいる土地という印象が強いらしい。加えてここ数世代のグランドロンの版図拡大と戦争の記憶からか、恐ろしい人びとと思われていることすらある。この数十年の間にマールとノードランドを実際に失ったルーヴランの王宮でグランドロン国王がよく思われているはずはないと思っていた。

けれど、それを差し引いても、ラウラの不快そうな表情にはひっかかる。結婚の話が進んでいるのは姫の方なので、そのことを氣にする

必要はないのだが、他のことには理性的なものの見方をするこの娘らしくないと訝った。

その日の午後は授業がなかったのだが、マックスは進捗状況をザッカに報告するために登城した。簡単に報告をしている間、向かいの広間で矮人である道化師に滑稽な踊りをさせているマリア＝フェリシア姫とその仲間たちの馬鹿げた笑いが聞こえてきた。マックスもザッカもそのためにわずかに言葉を切った。彼は不快感が顔に出ないように骨を折ったが、ザッカは隠そうともせずに首を振った。

「まったく……」

報告を終えると退出するために彼はザッカの為政室を出て、王女のいる広間の前を通らないように裏庭に近い方の階段を使った。そこは大きなバルコニーへと続いていた。こちらに来ることは滅多になかったので、彼はゆっくり歩くことにした。

バルコニーから眺める景色はなかなか美しかった。すぐ下には中庭となっている白薔薇が咲き乱れる苑があった。見事に手入れされており、その手間は大変なものであろうが、王女や取り巻きの女官たちは全く見向きもしていないようで、人影もなかった。おや、そうでもないな。彼はつる薔薇の間をゆっくりと進む深緑のドレスに目を留めた。そう、午前中に教えていた生徒の片方だ。

あの娘は、いつもあのように一人なのだろうか。マックスは、後ろから響く王女たちの騒がしい笑い声の方を振り返って見た。こんなひどい騒ぎに加わりたがらずに薔薇を眺めている娘がいることが好ましくて、彼はそっと微笑んで階段を降りていった。

上から見ていた時にはわからなかったが、降りてみるとその苑は薔薇の香りに満ちていた。香りは体を浮かせるような効果があった。きちんと歩いているにもかかわらず、足元が軽く地面から離れているように感じるのだ。広間から聞こえる馬鹿騒ぎに苛ついていた神経があっという間に静まっていった。

そのまま歩いていると、緑色のドレスが目に入った。

「バギュ・グリ殿」

ラウラははっとして振り向いた。

「先生……」

「上から姿を見かけたので。邪魔をしたでしょうか」

「いいえ、とんでもない。ただ、歩いていただけですから」

「こんなに美しい苑がこの城にあったとは知りませんでしたね」

マックスが見回しながら関心するのを見てラウラは小さく笑った。

「お城にずっと住んでいても花の時期をご存知ない方が多いのです。ここはあまり人が来ないので。そのほうがいいんです。独り占めできますから」

マックスは一人の若い娘がここにいるとはじめて感じた。それはとてもおかしな言い草だが、彼の実感だった。この職を得てから彼の意識はずっともう一人の生徒に注がれていた。マリア＝フェリシア姫が類いまれな美女であるからだけではなかった。彼の仕事の評価は姫が何を習得したか、本人と国王がどう満足したかにかかっていた上、その仕事が大変困難であったからだ。

姫の頭脳は格別ほかの者に劣っているというほどではないと思う

のだが、進歩は遅かった。何よりも彼女は非常に怠惰だった。課題を熱心にこなすよりも、ほんのわずか魅力的に微笑んで課題そのものをなかったことにしてもらうのを好んだ。それはどうやら常に成功してきたメソッドらしかった。実際、マックスが何度か彼女のこの抵抗に屈してしまった。形のいい口元と緑の輝く瞳の魅力に屈したのか、権力に屈したのか、まだ判断が難しい所だった。だが、このままでは彼の教師としての評価に差し支えるということを忘れるほどにはその微笑の虜になっているわけではないのが幸いだと思っていた。

彼の頭にある生徒はマリア＝フェリシア姫一人だった。たとえ常にもう一人の娘が授業に参加して、同じ課題に挑戦していたとしても。マックスがその存在をしばしば忘れてしまうのは、ひとえに彼女が全く手のかからない生徒だったからだ。彼女は出した宿題を必ずやってきた。授業中に課題を与えると、やろうとしない姫の方に意識を集中して手助けをしているだけでかなりの時間が過ぎてしまう。氣がついてラウラの課題に意識を向けると、それは既に終わっており、さらに訂正すべき箇所もどこにもなかった。彼女は賞賛を求めるような表情も見せず、それゆえ彼は本来ならば全く褒めたくない姫の情けない回答に与える賞賛の五分の一もラウラを褒めたことがなかった。

姫がいない、そして授業でもないこのわずかな時間、マックスははじめて添え物の生徒としてではなくラウラその人に氣をとめた。品はいいが相変わらず地味な色合いの長袖のドレスに身を包んで、長い髪をきっちりと後ろで縛りまとめ、小さい真珠の飾りのついたネットで覆っている。どこにも隙がないその立ち姿は、親しい語らいを拒否しているような印象を与えるが、マックスが話しかけても立ち去ろうとしない所を見るとそういう訳でもないらしい。

「私の授業の教え方はいかがですか。なかなかあなたの意見を伺う機会がないのは残念です、バギュ・グリ殿」

ラウラは驚いたように顔を上げて、それからわずかに嬉しそうな表情になった。

「とてもわかりやすくて、素晴らしいと思いますわ。題材も広範囲に渡っていて、毎回新しいことを学ぶのが楽しみです」

「そうですか。それはよかった。私の質問に驚かれたようですが……」

マックスがそういうと、ラウラはわずかに微笑んだ。

「今までどの先生も、私が授業をどう思うかなんて氣になさらなかったものですから」

マックスはぎくっとした。自分自身もつい数分前まで同じだったからだ。

「あなたのような熱心な生徒に失礼なことですよね」

「いいえ、授業料を払う方にとって大切なのは、私が何を学んだかではありませんから。私は、最高の教育を受ける機会を得られてありがたいと思っています」

彼女の表情はわずかに憂いに満ちたように感じられた。

森の詩

「どうして城に住まないわけ？」
マリア＝フェリシアは少々いらだって訊いた。午後にお抱え商人が東の国からの絹の見本を持ってくるというので語学の時間を朝に変えたかったのに出来なかったからだ。
「城下町の事を親しく見聞きする事が出来ますのでね」
「そんなこと何の役に立つのよ」
　絹を見たい姫は、授業をさっさと切り上げさせてさっさと孔雀の間に行ってしまった。苦笑して羊皮紙をたたんでいるマックスの側に、そっとラウラが近づいてきた。
「先生は城下をくまなく歩かれていらっしゃるのですか」
おずおずと彼女は訊いた。
　教える事はいつでもすぐに覚え、知識も豊富なのに、いつも控えめでほとんど会話をしようとしないラウラが、敢えて質問をしにきた事をマックスは意外に思った。
「いいえ。まだ、くまなくというほどは。市場や職人街など活氣のある場所はほとんど行きましたが」
「あまり活氣のないところも……たとえば貧しい人たちのいるところは」
　マックスはラウラの顔をじっと見た。
「ええ。行きました。驚きましたね。あなたがあそこの事をご存知とは」
「いえ。よく知っているわけではないのです。でも……。どうなのでしょう。グランドロンでも貧しくてただ死を待つだけのような人々がたくさんいるのでしょうか」
　ラウラは思い詰めたように訊いた。この娘は。マックスは、はじめて目立たない《学友》の、王女の影ではない、真の人間としての姿を感じた。今まで多くの貴族の令嬢を目にしてきた。義務やポーズとして貧しい者に幾ばくかの金を恵む事をたしなみとして実行した者はいたが、死を待つばかりの貧民たちの事で心を痛めているような娘は見た事がなかった。そもそも、彼女たちはそのような場に行くチャンスすらないのだ。
　けれど、この娘は、あそこを知っている。どういうきっかけで知る事になったのかわからないが、あの悲惨さに直面する勇氣もあるのだ。彼は思い悩む様子の彼女を力づけようと優しい目を向けた。
「バギュ・グリ殿。貧しい者たちはルーヴランだけでなく、グランドロンにもセンヴリにも、世界中のどこにでもいます。旱魃や疫病も繰り返しこの世のどこかを襲います。辛く悲しい事もなくなりはしません。けれど、各国の支配者たちは、少しずつですが彼らがただ惨めな死にだけ向かわないように努力を続けているのではないでしょうか。この国で、ザッカ殿が進められている治水事業のように。グランドロンでも、国王陛下は確かに貧しい人々の救済措置を進めています。ご安心ください」
「グランドロンの王様が？」
ラウラは意外だといわんばかりに目を見張った。マックスは笑った。やはり、この方には、我が王はよほどの悪者と思われているらしい。

＊　＊　＊

次の授業に、マックスは広間に移動し、楽人たちに同席するように頼んだ。ダンスのレッスンだった。

「これは『森の詩』と呼ばれるメロディでございます。グランドロンでは、新年、婚礼、それから夏至祭に、この曲に合わせて踊る習慣があります。王と王妃は公式の場で最初に踊ることになっていますので、なんとしてでも覚えていただく必要がございます」

マックスはリュートを抱えて、ゆっくりと歌いだした。

「O, Musa magnam, concinite cantum silvae.
Ut Sibylla propheta, a hic vita expandam.
Rubrum phoenix fert lucem solis omnes supra.
Album unicornis tradere silentio ad terram.
Cum virgines data somnia in silvam,
pacatumque reget patriis virtutibus orbem.

おお、偉大なるミューズよ、森の詩を歌おう。
シヴィラの預言のごとく、ここに生命は広がる。
赤き不死鳥が陽の光を隅々まで届け、
白き一角獣は沈黙を大地に広げる。
乙女たちが森にて夢を紡ぐ時
平和が王国を支配する」

そのメロディをなぞりながら、楽人たちはゆっくりと演奏をはじめた。マックスはしばらく共に演奏していたが、満足のいく状態になると、自分は演奏するのをやめてリュートを脇に置き、ラウラの前に立った。伸ばした両手を繋ぎ、斜めに体をにじってお互いに対照的な方向にステップを踏み出す。反対にも踏んだ後、ゆっくりとお互いの周りを回る。

「そうです。その通り。次は反対に。私の腕の下を通って、はい、こちらへ」

彼の声が耳のすぐ側で聞こえる。繋がれた手に優しい暖かさを感じる。彼女の頬は紅潮した。彼は不思議そうにラウラを見た。何かを訴えかけるような瞳の輝きは、単なるダンスのレッスンにしては、大げさだった。彼女は、はっとしたようにうつむいた。それで、彼はようやく氣がついた。この娘は、男とダンスを踊った事などないのだろう。政治や歴史の話などをよどみなく語れても、恋愛に関してはまだ少女と変わらないのだ。こんなにうろたえている。

この娘は、姫やこの場にいる若い侍女たちの多くよりも年上だが、恋愛に関してはもっと幼い少女のようなのではないかと思った。男に対して媚びたり、恋愛ゲームを楽しもうとしたりした事はないのではないだろうか。それは初でその手の駆け引きを知らないからというよりは、その隙のない様がずっと若い男たちを遠ざけてきたからだと思われた。

ラウラに恋愛経験がなさそうなのは、彼女の特殊な事情が絡んでいるのだと理解していた。侯爵の実の娘ではない、《学友》となってからは、侯爵家にもよりつかないらしい孤独な娘との関係など、将来の

邪魔にしかならないと誰もが思うのであろう。多少の野心のある宮廷の男たちなら、同じバギュ・グリ侯爵令嬢でもこの娘の妹である令嬢エリザベスに関心を示す。実際にエリザベスの方は、女官とは名ばかりで、毎日宮廷で男たちに囲まれて次々と恋の花を咲かせているとの噂を耳にしていた。

ラウラが問題なく踊れるようになると、彼はその手を離して、マリア＝フェリシア姫に向き直った。さてさて、こっちの方が問題だな。

「さて、姫君。ステップは覚えていただけたでしょうか」

「だいたいね」

そういうと姫はことさら華やかで美しい笑顔を、彼がはっとして、見入ってしまうような角度で花開かせた。楽人たちが、ずっと真剣に重厚に演奏を始めると、二人は広間の中央で踊りだした。

「そう。お上手です」

そういいながら、姫を見つめるマックスを、部屋の隅からラウラが憂いに満ちた目つきで追っていた。

隠せぬ想い

「赤くなってたわね」

マリア＝フェリシアは馬鹿にして言った。ラウラは困ってうつむいた。

「よくわかっていないみたいだけれど、王家に出入りする教師は少なくとも男爵家の出身でなくてはいけないはずよ。つまり、あなたにはチャンスがないってわけ。もっともあの人、下等な趣味があるから、上手くいけば愛人ぐらいにはなれるかもね」

「いいえ、私は、そんな……」

姫は高らかに笑った。新しい楽しみが出来たわ。あの軽薄教師をきりきり舞いさせれば、この腹立たしい娘を苦しめる事が出来る。鞭も悪くないけれど。

ラウラは姫の言葉に傷ついたりはしなかった。初めて会ったその日から、王女は常に彼女を貶め馬鹿にした口調でしかものを言わなかった。彼女はそれに慣れていた。そして、その王女のことを多くの貴公子や女官たちが「なんて美しい方だろう」と褒めそやすことにも反発の思いや怒りを感じることもなかった。

けれど、今日は違った。マックス・ティオフィロスが、ラウラの腰に手を回し、息がかかるほど近くに顔を寄せて踊った時に、彼女の胸は高鳴り、楽人たちの奏でる歌が永久に止まらなければいいと願った。けれど、それはとても短い時間だった。彼は、ステップを憶えた姫の手を取り優雅に踊った。自信に満ちて微笑む姫はいつもに増して美しかった。彼は姫がステップを間違えても叱ったりせずに、長い時間をかけて踊っていた。

わかっている。どんな殿方も、姫の手を望むのだ。深夜まで予習と復習をする努力も、心を込めて仕事をすることも、姫の美しさ、華やかさ、ぎりぎりに魅惑的なわがままの前では何の価値もない。それは先生も同じなのだ。

ラウラは毎日のマックスの授業を心待ちにしていた。たとえ、いつもほとんど話しかけてもらえず視線も合わせてもらえないにもかかわらず、わずかな会話にでも加われるようにとグランドロンの詩集を暗唱し、城に一冊だけあったディミトリオスの著作を読んだ。

マックスは話す度にラウラのグランドロン語が飛躍的に上達していることに驚いたが、まさか難解で知られる老師の著作を原語で読むほどの努力を重ねているとは夢にも思わなかった。

一方で、王女の一向に上達しないグランドロン語には危機感すら持っていた。グランドロン人どころか、外国人にもわかってしまうほどのお粗末さだ。これが知れ渡ったら彼の今後の仕事にも差し支える。彼は躍起になって姫の教育に時間をかけた。

「ねえ。書物で言葉を憶えるのって、とても退屈だわ。何かもっと面白い方法はないの」

マリア＝フェリシア姫が言ったので、マックスは肩をすくめると本を閉じて言った。

「承知しました。では、本日はちょっとした言葉遊びをしてみましょう。お二人がどのくらいグランドロンの言葉をお使いになれるかもわかりますしね」

「どんな遊び？」

姫は少しだけ期待して首を傾いだ。こうしたちょっとした動きがとてもチャーミングだった。これまでの教師たちが怠惰でやる氣のない態度に強く文句を言えなかったのがよくわかるとマックスは心の中で思った。

「《強いもの較べ》というゲームです。お二人と私の三人で順番に、より強いものをグランドロン語であげていくだけのゲームです。なぜそれが強いのかもグランドロン語で説明してくださいね。それと、何にも増して強いことがわかっている天におわす神様だけは答えにしてはなりません。それ以外でしたら、ものでも概念でも全くかまいません、いいですね」

大して面白そうでもないと思ったのか、姫は口を尖らせたがマックスはかまわずに続けた。

「では、このお菓子からはじめましょう。さあ、殿下、お菓子よりも強いものをあげてください」

「お菓子を作るのになくてはならないもの。それが砂糖です。だから砂糖の方がお菓子より強いのです」

このような単純な文章でも、慣れない外国語で述べるのは大変だった。まじめに言葉を学んでこなかった姫はカリカリしていた。

「その調子です。では、バギュ・グリ殿。どうですか」

彼の言葉に、ラウラはすぐに答えた。

「砂糖を運んでいく姿をよく見ますから、蟻は砂糖より強いでしょう」

マリア＝フェリシア姫は、言えるうちにと、急いで続けた。

「蟻なんか、刃で切っちゃえるでしょう。刃よ」

彼は少し笑って続けた。

「火がなければ刃を溶接・鍛造することはできません。火がより強い

でしょう」
　マックスに先を促されてラウラは続きを口にした。
「岩に火を近づけても燃やすことはできません。ですから岩の方が強いと言ってもかまわないでしょう」
　マックスに促されたけれども先を思いつかなかった姫はむすっと口を閉ざして横を向いた。マックスは姫に恥をかかせないように続きを自分で言った。
「一滴、また一滴と落ちる滴が岩に穴をあけることがあるのをご存知ですね。つまり水が岩よりも強いのです。どうですか、バギュ・グリ殿」
　ラウラは窓の外を少し見てから答えた。
「水をどんどん吸って自分の中に取り入れていく植物は水を支配しています。水はそれに逆らうことができません。ですから植物はもっと強いと思います」
　マックスが頷いて同意すると、まったく詰まることなく答えるラウラに腹が立ったのか、姫が大きな声を出した。
「植物なんか必要ならいくらでも買えるわ。だから富よ」
　マックスは微笑んで続きを言った。
「友あるところにこそ富ありと言うではないですか。そうなると友情の方が強いと言ってもいいですよね、バギュ・グリ殿、続きをどうぞ」
　ラウラはマックスを見ていた。姫の答えは内容も情けないが、語順や使う単語もマックスが辛抱強く教え続けている宮廷で通用するグランドロン語からはほど遠かった。けれど、それに落胆した様子もなくにこやかに笑っている。もしかしたら、マックスにとっては姫の言葉は吟遊詩人の端麗な詩よりも心地よく響くのかもしれない。
　友情……。確かに富より力がある。富ではつなぎ止められない人も深い友情のためなら留まるだろう。たとえば姫との間にもっと友情と思える深い情交があったなら、ラウラは義務である姫の二十歳の誕生日を超えても、仕えようと思っただろう。かつてかの伝説の男姫（ヴィラーゴ）ジュリア・ド・バギュ・グリがグランドロンへと嫁ぐブランシュルーヴ王女に従って異国へと行ったように。けれど、姫とラウラの間には義務しかなかった。これまでの仕打ちを思えば、ザッカが口にしたように、いつまでも姫に仕える事など考えられない。
　けれど……。ラウラは知っている。たとえ冷たくされようと、無視されようと、その人のためにすべてを置いてでも駆けつけたくなる想いがある事を。決して報われないのだといわれても、変わる事のない強い想いを。彼女はしっかりとした態度で続きを口にした。
「愛はときに友情をも引き裂くと詩に詠われています。ですから愛の方が強いように思われます」
　王女は馬鹿にした口調で、けれど趣旨をを全く無視してルーヴランの言葉で吐き捨てた。
「愛なんて。王がほかの男と結婚しろといったらそれでおしまいでしょ。だから王権の方が強いに決まっているわ」
　マックスはその王女のいらだちをなだめるように、しかし、グランドロン語の授業であることを思い出させるべく言語を変えて言った。
「世界中の権力を握った王ですら、美しき女性には逆らえません。つまり美は王権にも勝りますかな」
　それはラウラにはひどくつらい言葉だった。マックスに目で続きを

求められて彼女は下を向いた。何を言っても殿方の心をとらえている美に対するひがみにしか聞こえないだろうと思った。やがてうつむいたまま答えた。
「美しい薔薇も時間が経つと枯れてしぼんでいきます。老いは美よりも強いのかもしれません」
マックスは深く頷いた。マックスはラウラが考えていたように、マリア＝フェリシア姫の麗しさに惑わされていたわけではなかった。単に難しい生徒に授業を放棄させないためにご機嫌をとっていただけだった。その王女はへそを曲げてもうひと言もグランドロン語を話そうとはしなかった。口にしたくとも彼女の知識で使える単語が考えつかなかった。
マックスは姫に解答を続けさせる事をあきらめた。ここから先は授業ではなかった。ラウラのグランドロン語はもっとずっと先をいっていたから。彼女のグランドロン語用法や知識ではなく、これまでほとんど氣に留めたこともなかった彼女の深く哲学的な想いに興味をそそられた。マールの「金色のベルタ」の哀れな後ろ姿が浮かんだ。神の家にいながら人生のほとんどを虚しく待ち、老いることだけに使ってしまった女。マックス自身にはその救いが考えつかなかった。この娘はなんと答えるのだろう。
「老いた人びとが傷つき苦しむのは、人びとに忘れ去られて省みられなくなることです。どうですか、バギュ・グリ殿。忘却よりも強いものをおっしゃれますか」
ラウラははっとしてマックスを見た。マックスはゲームが始まった時のような朗らかな表情はしていなかった。この城の中で、省みられないことへの苦しみについてラウラほど考えている人間はわずかしかいなかった。ザッカがラウラに見せた恐ろしい貧民窟はこの城から見えるほど近い所にある。多くの人びとが、王国からも街の人びとからも忘れ去られ、なす術もなく死んでいこうとしている。彼女は「死」をあげようかと思った。哀れな貧しいミリアムの苦しみを終わらせたのは「死」だった。
けれど、彼女は頭を振った。ラウラには全能の神がその絶望的な答えを求めているとは思えなかった。ザッカが彼女にあの貧民窟を見せた、本当は王女に理解させてこの国の未来を託したいと思ったのも、その答えのためではないと思った。親戚からも養父からも関心を示されず、この城の中で耐えて生きている自分が、省みられないことを乗り越えるために必要なのはどんなことだろうかと考えた。答えは一つしかなかった。
「赦しは魂を解放すると申します。ならば忘れ去られる苦しみからも解き放ちましょう。赦しです」
彼もまた「死」という答えを思い描いていた。そして、ラウラがしばらく逡巡していた思考の内容を推し量ることはできなかった。だが、彼女が澄んだ瞳で言葉を選んだ時の佇まいに強い印象を憶えた。しばらく言葉を継げなかった。少し間を置いてから言った。
「それこそ真の貴婦人の回答です。あなたがこのゲームの勝者です」
マリア＝フェリシア姫は、不満に鼻を鳴らした。自分がグランドロン語でラウラに適わないだけならともかく、マックスがラウラに女性として最高の賞賛を与えたのは許しがたかった。貴婦人ですって？

その子が卑しい肉屋の孤児だと教えてやりたい。しかし、今そんな発言をするのは、自分が貴婦人でない証明のようなものだったので、かろうじて発言を控えた。

マックスは姫の態度にそろそろ苦言を呈すべきではないかと思った。いくらレオポルド二世がルーヴラン語に堪能だと言っても、グランドロンの豪胆な国王なのだ。この城の召使いのように、この美しいだけの姫の顔色を伺ってくれるとは思えない。それにラウラがめざましい進歩を見せたとしても、本来の生徒である姫の進歩がこの程度ではマックスの教師としての評判にも影響する。

「さて、王太女殿下には、申しわけございませんが、すこし罰を受けていただかなくてはなりませんね。授業の最中にルーヴラン語は使わないという決まりをこれで三度も破られましたから。どんな罰にしましょうかね……」

そう言った途端、マリア＝フェリシア姫はけたたましく笑い、ラウラが青ざめて、長い袖で覆われた左腕を押さえて後ずさった。マックスはそのどちらの反応もよく理解できなかった。いつも扉の所に控えていた無表情で何をするのかわからなかった男が、腰の所から鞭を取り出してラウラの方に近づいてきた。

貴婦人の面影

「許して下さい」

その言葉に、ラウラはびくっと身を強ばらせて恐る恐る振り向いた。誰かがくるとは思わず、安心して泣いていたのに。薔薇園の片隅はラウラの秘密の隠れ場所だった。

「……先生」

探してきてくれたのだろう。マックスの顔は青ざめていた。ラウラは慌てて涙を拭った。

「知らなかったで済まされる事ではない。あなたが姫の罰を受けさせられる事は聞かされていたのだから罰の話などすべきではなかったのだ。本当にすっかり忘れていたのです。それに、まさか侯爵令嬢のあなたに、あんな罰を……」

マックスは姫にグランドロンの物語を清書させるような罰を考えていた。だが、王女も周りの人間も、姫の罰は全てラウラが左腕を三十回鞭で打たれる事だと言った。マックスが罰を撤回すると言っても無駄だった。鞭を持った無表情の召使いは、まったく手加減せずにラウラの左腕、はじめて見た赤くただれている哀れな肌を鞭打った。まだ前の怪我が治りきっていない弱い肌は、既に一度目の鞭で切り裂かれ、《学友》は痛みに涙ぐみながら歯を食いしばった。

罰が終わると、すぐに忠実な召使いアニーが用意していた布でラウラの傷口を抑え、よろめく彼女を支えながら手入れのために別室へと連れて行った。姫はうっすらと笑いすら浮かべていた。マックスはそ

の様子にぞっとした。ひどい。こんな女性が次期女王だなんて、とんでもない国だ。しかし、彼女は彼の国の后にもなる予定の女性なのだ。国に戻って国王に仕えよと言った老師の言葉をマックスは完全に忘れる事に決めた。

しかし、彼にはどうしても理解できなかった。ラウラは王女ではないが、少なくともバギュ・グリ侯爵令嬢ではないか。あんなにひどい事をどうして誰も止めないのだろう。授業が終わったので、彼は退出してもよかったのだが、どうしてもラウラに謝りたくて城の中を探した。アニーは「どこにいらっしゃるのか、存じ上げません」と言った。そっとしてあげたいという思いやりがにじんだ言葉だった。マックスは、それを無視して先日ラウラを見かけたここへとやってきたのだ。

ラウラは何かきちんとした事を言おうとしたが、何も思いつかなかった。ため息をついて肩を落とし足元をじっと見つめた。

「先生。どこの国でも同じなのでしょうか。貴族に生まれてこなければ、どんな目にあっても耐えなくてはならないのでしょうか」

「バギュ・グリ殿？」

ラウラは首を振った。

「私は侯爵令嬢ではありません。城下の肉屋の娘として生を受けた者です。両親が流行病で亡くなった後、どの親戚からも引き取りを拒否された、みなし児です。ここに来るために形だけ侯爵さまの養女となったのです」

彼は驚いて、うつむきつぶやくラウラの姿をじっと見た。

「知られたくありませんでした。教わる資格などない、取るに足らない存在とお思いでしょうね」

彼は激しく頭を振った。

「出自が全てだと言うなら、僕こそ、あなたに教える資格などない。僕は鍛冶屋の次男だ」

ラウラは面を上げた。

「我が師は、出自など氣にしなかった。何を学び、何を得たか、それが全てだった。あなたもそうだ。肉屋で生まれようが、先祖に一人も貴族がいまいが、この宮廷のほとんどの者がわかっているはずだ。――あなたがこの国でも有数の貴婦人である事を」

彼はラウラの瞳を覗き込んだ。どうしてだかわからないが、言葉があふれてきた。

「僕は旅をしてきた。センヴリにも行った。ヴォワーズでも仕事をした。常に上流階級で、名家の子息や令嬢ばかりだった。だが、家柄だけが人を尊くするわけではない」

「貧しく生きるだけで精一杯の人びとが、天なる父の御心に叶う尊い生き方が出来ないのは確かだ。だが、それは生まれが低いからではない。それを証ししているのが、他ならぬあなたではありませんか」

彼の熱のこもった言葉に、ラウラは燃えるように痛む手首を一瞬忘れた。

「私はここに来るまで本当の貴婦人と呼ぶにふさわしい女性を一人しか知らなかった。僕の《黄金の貴婦人》に匹敵する方は一人もいなかったのだ」

「《黄金の貴婦人》……？」

「子供の時に数回だけ会った方だ。我が師を訪ねてこられた時に、お茶をお持ちしてお言葉をかけていただいた。優しくて美しくて、天国にいる聖母とはこのような方かと思ったものだ。一度、師のお供で宮廷に上がり、現在の王太后である女王陛下にお目通りした事もあるが、あの方と較べたら陛下は女官とも変わらなかった」

ラウラは遠い目で子供時代の思い出に浸るマックスをじっと見つめていた。彼は白いハンカチーフを取り出すと、包帯を通して血がにじみでてきたその左腕をそっと取ってゆっくりと傷にあてた。

「いけません。汚れますわ」

「氣の毒に。僕のせいで」

「先生のせいではありません。姫は、あれを見るのがお好きなのです。だから、先生でなければ他の方の前で、わざと罰しなくてはならないことをなさるでしょう」

「あなたは、こんな仕打ちにずっと一人で耐えてこられたのか」

答えずに彼女は遠くを見ていた。彼がその視線を追えば、それはどこまでも続く深い森《シルヴァ》へと向かっていた。

「バギュ・グリ殿？」

「……もう少しです。長くても、あと一年。もし姫のお輿入れが決まれば、もっと早くに、私は自由になれるのです」

「自由に？」

彼女はマックスの顔を見た。そして、自分が誰にも言わなかった望みをうかつにも口に出してしまった事を恥じてうつむいた。彼は答えを促さずに彼女の顔を見つめていた。その瞳は優しく自分は味方だと伝えているように思えた。鍛冶屋の息子だと言ったのもラウラを勇氣づけた。彼女は小さな声で続けた。

「姫がご結婚なさるか成人なされた時に、《学友》の役目は終わります。その時には、私はどの国に行っても通用する《正女官》のディプロマをこの手に頂ける事になっているのです。バギュ・グリ侯爵にご迷惑をかけることを怖れる必要もなく、姫からも離れて、自分以外の咎を責められる事もなく自由に生きられるのです――先生のように」

「私のように？」

「国から国へ、街から街へ、行きたい所へご自分の意志で旅をなさる。私もそんな風に生きたいのです」

マックスは微笑んだ。哀れに思ったのは失礼な事だったのかもしれないと心の中でつぶやいた。たおやかに見えて強い人だ。

「あなたはきっと自分の道を見つけるでしょう。今まで苦しんだ分、誰よりも幸せになってほしい」

ラウラはさっと顔を赤らめた。それから、物言いたげに上目遣いで彼を見た。けれど、彼女は何も言わなかった。

若き国王

　宮廷はざわめいていた。
「それはどういうことだ！」
《氷の宰相》が取り乱したのを廷臣たちははじめて目にした。
「ですから、こちらに間もなくお見えになるのは、使者殿ではなく、グランドロン国王その人だというのです」
取り次ぎの伝令は、汗でびっしょりになっていた。ただの使者が来るにしては、あまりにも護衛の部隊が多いので、念のためにザッカが使者は何者なのかと確認させた所、もはや城下に入っているグランドロン側が伝えてきたのだ。
「うむ、それは困った」
ザッカは頭を振った。グランドロン国王レオポルド二世が来た理由はわからなかった。まさか姫本人の顔を見たいわけでもあるまい。姫は噂に違わず美しい。その点の心配はない。だが、わずかの時間でも言葉を交わせば、あの軽薄な人柄が知れる。あのマリア＝フェリシア姫を目の前にして結婚したいと思う男などいないだろう。あの王は、すでに、センヴリ王国や、マレーシャル公国でも姫君を様々な口実をつけては袖にしてきているのだ。だからこそ、使者に姫を会わせるつもりもなかった。だがレオポルド二世が訪れているのにマリア＝フェリシア姫が奥に引っ込んでいるわけにはいかない。
　ザッカは副官であるのジュリアン・ブリエに言った。
「ベルモント夫人をここにお呼びして」
　ブリエは、急いで宮廷奥総取締を勤める女官を呼びに行った。夫人は、息を弾ませてブリエとともに入ってきた。
「お呼びと伺いました。姫君のお召しかえの事で？」
「姫は、国王の滞在中は奥にいていただくように。バギュ・グリ殿に赤毛のカツラを用意しなさい。出来る限り濃いヴェールをし、顔が見えないようにしなさい。服は、もちろん長袖のものを」
　夫人は震えた。
「ラウラに、姫の身代わりを……？」
「今の殿下にグランドロン王との社交の会話は不可能だ。語学力だけではない、話す内容そのものもだ。いいか、国王にこの縁談を断らせてはならぬ。断るのはこちらでなくてはならぬのだ」
彼女は震えつつも頷くと、急いで奥に戻っていった。
「宰相殿は氣でも違ったのですか？　私に王太女殿下のフリをせよとおっしゃるのですか？」
ラウラはベルモント夫人を見つめて身を震わせた。
「その通り。心配いりません。宰相殿もこのお話を破談にしたいみたいなの。ただ、姫の名誉にかけて、向こうから断られるような事があってはならないというのよ。姫は二ヶ月経っても、いまだにグランドロンの言葉での挨拶もおぼつかないでしょう。あちらの情勢も頭には入っていないし、国王と対等にお話をするなんて不可能だと、宰相殿は考えていらっしゃるの。まあ、お考えは間違っているとは言えませんよね。わかるでしょう、ラウラ。全てはあなたにかかっているの。とにかく、あちらに断る理由を与えない、無難な対応をしてほしいの」
ラウラは青ざめた顔で頷く他はなかった。
　ルーヴラン国王エクトール二世が王女に対する侮辱とも取れるこ

のような提案を、なぜあっさり承諾したのかラウラにはわからなかったが、少なくとも彼はそのことに対するとまどいは全く見せなかった。ラウラが国王と手をつなぐのははじめてだった。広間に入る前に低い声で囁いた。
「頼むぞ、ラウラ」
「はい、陛下」
　ラウラは公式の場で貴婦人が使う円錐型の帽子を冠りヴェールを顔の前にたらしていた。これまでにルーヴランが使った伝統的なヴェールは白く非常に薄い形式的なものだったが、今回は黒くてしかも編みが密で、ラウラ自身も周りの状況がはっきりとは見えていなかった。
　国王に手を引かれて広間に入っていくこと自体、本来なら動揺して堂々とできそうもなかったが、ヴェールのせいで暗い廊下では一人ではしっかりと進めなかったので、エスコートされる歩みも自然になった。そして、広間の中心でグランドロン王に紹介されてその手を渡される時にも、不安に満ちた表情を見られるのではと怖れることもなかった。
　明るい光のもとではラウラの方からはグランドロン王を見ることができた。背が高く、黒いまっすぐな髪を後ろで束ねている。赤いどっしりとした天鵞絨の上着は華やかな飾りと相まって非常に重いに違いないが、それを感じさせずに胸を張って立っている。濃い眉とはっきりとした鼻梁が目につく。
「マリア＝フェリシア姫、お会いできて光栄です」
流暢なルーヴラン語の挨拶とは裏腹に、マリア＝フェリシア姫を前にした時にどの男性もそうなる、驚きと賞賛のまなざし、そしてすぐにわかる心惹かれた様子を全く見せなかった。そして、それは当然のことだった。ヴェールのせいで目の前にいる相手の顔などは全く見えなかったし、見えたとしてもそこにいたのは姫ではなかったから。
「私こそ光栄でございます、陛下。遠くからようこそルーヴランにお越しくださいました」
ラウラがそういうと、レオポルドは少し意外そうに見た。
「流暢なグランドロン語だ。称賛に値します」
「はじめたばかりで拙く、失礼がございましたらお許しくださいませ」
　ザッカの合図で楽士たちが円舞曲を奏ではじめた。広間の中心で、礼儀作法に則った一礼をすると、レオポルドとラウラは踊りはじめた。それを合図にルーヴラン国王夫妻、両国の臣下たちがゆっくりと踊りに加わった。
　マックスは何かあった時に姫と国王の通訳をすることができるようにと、この謁見への同席を認められて広間の片隅に立っていた。だが、実際には通訳はまったく必要なかった。国王レオポルド二世はマックスと同じくらい自由にルーヴラン語を理解したし、ラウラのグランドロン語もこの程度なら全く困らないほどになっていることはわかっていたから。もちろん、マリア＝フェリシア姫のグランドロン語であったなら、こうはいかなかったことははっきりしていた。
　彼は召使いの差し出した盆から、銀の盃を受け取るとそれを飲みながら広間の踊りを見ていた。その視線の先には、いずれは仕えるよう

にと師匠に命ぜられた彼の君主と、ここ数ヶ月の日常生活で常に側にいる彼の生徒がいた。レオポルドの口元が定期的に動いているので、二人が踊りながら会話をしていることがわかる。何を話しているのだろうと思った。ベフロア娼館の女たちと遊んでいるうちに憶えた甘く心にもないささやきを、あの無垢な娘に告げたりしているのではないだろうか……。

そこまで考えて、はっと我に返った。そんなわけはない。わが王はあれを王女だと思っているのだ。ルーヴラン王国の未来と誰もが羨む美貌を兼ね備えた、政略の花嫁候補だと。だからといって、なぜそんなに近づかなくてはならないのか。

マックスはこれまで若き国王に対して親しみを持ってきたことはなかった。彼の安全のための実験係として苦しんだことに対して怒りを持ったことはなかった。どちらにしても彼がそんなことを知っていたはずはないから。ただレオポルド二世は鍛冶屋の次男だった彼には遠すぎる貴人だった。老師に「いずれは我に代わってお前があの方にお仕えするのだ」と何度言われても実感が湧かなかった。まともに言葉を交わしたこともなければ、興味を持ってもらったこともなかった。いつか自由になることだけを秘かに願い続けてきたマックスには親しくしてもらわなくても構わなかった。

だから、今レオポルドが誰と踊ろうが何も感じないはずだった。だが、このはっきりとした不快感はなんなのだろう。ようやく思い当たって、彼は愕然とした。相手がラウラだからだ。

なんてことだ。僕はあの娘に惹かれているらしい。そんなばかな。落ち着け。たぶんこれは単なる憐憫だ。あの娘の境遇が、毒の実験係に使われた自分のそれと重なるから……。マックスは盃をあおった。

曲が変わった。マックス自身が教えたグランドロン王国の舞踏祝祭曲『森の詩』のメロディだった。グランドロンからの一行は国王を含めて一様にこの歓迎に驚きの表情を見せた。レオポルドはそのままラウラと『森の詩』を踊りはじめた。ラウラはマックスに習ったようにきちんとステップを踏んだ。右へ、左へ、そして右に踏み出してお互いの周りを回る。ヴェールのすぐ近くにまでレオポルドの顔が近づいている。国王はまだラウラに話しかけている。マックスは顔を背けた。何に対してこれほど苛だっているのか説明ができなかった。そして、黒いヴェールの向こうで王女の替え玉にされた娘が何を考えているのかをも知ることはできなかった。

孤独な二人

風がわずかに吹く夜だった。寝付かれずに、そっと部屋を抜け出してガランとした城の中を歩いた。誰にも邪魔されない深夜は、ラウラの時間だった。影としての勤めから抜け出して、本当の自分の顔に戻ることの出来る、数少ない瞬間だった。彼女はグランドロン王訪問の緊張がまもなく終わることを心から喜んでいた。

先程、王と踊った広間にも誰もいなかった。影としての生活は間もなく終わる。どこかの国王と踊るなどということはもう二度とないであろう。それは不思議な感覚だった。ずっと怖れていたグランドロン国王という怪物が、自分の手を取り腰に手を回し、広間を旋回した。きちんとしたリードであったが、決して強引ではなかった。ラウラは混乱していた。マックス・ティオフィロスに対するような、純粋な信頼や思慕の氣持ちとは異なっていた。冷たく頭脳優秀な宰相ザッカに対する敬意とも違っていた。娼館の女たちといかがわしい遊びをする低俗な王と思っていたのに、その礼儀正しく理知的な会話に驚かされた。ラウラの国にとっては憎むべき敵、岩山のごとく征服すべき相手は、力強く自信に満ちているだけではなく、優しく暖かい手をしていた。

彼女はもう少し風にあたりたくて、バルコニーに向かった。戸はしっかりと閉まっていなかった。召使いが戸締まりを忘れたのか、いずれにしてもここは地上からはどうやっても届かない自然の要塞の上に浮かぶ広間なので、怖れずに外に出た。

半月の浮かぶのみの暗闇の中、誰かがそこに立っていた。それは先程の豪華な衣装ではないが、背格好からここにいるはずのない賓客その人だとすぐにわかった。レオポルド二世も、現われた女にすぐに氣づいた。

「……陛下」

その声で、グランドロン国王は、自分の花嫁候補が突然現われたことを知り、やはり驚いたようだった。

「そなたを呼んだつもりはなかったのだが」

「呼んだ？」

国王は、月の方に顔を向けてしばらく黙っていたが、やがてゆっくりと言葉を探しながら再び口を開いた。

「国王というものは、不便な身分だと考えていたのだ。自分の花嫁候補とゆっくり話をしたくとも、周りに何十人もの廷臣や召使いが控えている。数回の食事での会話やダンスの合間に、何を知ることが出来るのだろうとね。そなたもそう思ったことはないか」

ラウラは、ゆっくりと言葉を選んで答えなければならなかった。王女の回答に聞こえるように。しかし、嘘はつきたくなかった。

「私が生まれて以来、自分の思うように行動できたことはありませんでした。誰もが生まれ持った役目を全うせねばならぬのなら、多少の不便は諦めるしかないのではないでしょうか」

暗闇の中で、王が笑うのが聞こえた。

「不思議だ。悪く思わないでいただきたい。余はそなたが聡明な女性だという期待はまったく持ってこなかったのだ。美しいという評判はもちろん聞いたが、いずれ女王になる身としては、容姿ばかりが評判になるのは悔しくはないか？」

「美しいと言われることは、女にとって何よりもの喜びなのです。それがたとえ身分を慮って水増しされた讃辞であろうとも」
そういうラウラの口調には、反対に美への関心はほとんどないような響きがあった。レオポルドはよく見えないのに、暗闇の中にうっすらと浮かび上がる女の表情をじっと見つめた。
　マリア＝フェリシア姫は美しい。ラウラはそれを誰よりもわかっていた。どんなドレスを着ても、はじめて見るときは女のラウラでもはっとするほどだった。けれど彼女はその美しさを羨ましいと思ったことはなかった。たとえ、もし姫の半分の美しさでもあれば、マックスの視線をわずかでもとどめておくことが出来ると知っていても。
　彼女は王女にはなりたくなかった。ただ、ほんの少しでも敬意を払われ、世界を自分の思い通りにすることの出来る力がこの手に欲しいと思ったことはあった。ザッカに連れられて目にした城下の貧民街で饐えた臭いを放ちながら死を待っている男の目を見た時、塔から騎馬に蹴られている下働きの少年の姿を目にした時、姫の代わりに打ち据えられて流れ出る深紅の血が白薔薇の茂みを穢していった時、ラウラは本当の侯爵令嬢であったらどんなによかっただろうかと思った。

「美しいと賛美されることがそなたの望む全てなのか」
想いに沈んでいる時にその言葉を聞いたので、彼女は自分が姫の代わりを務めていることを一瞬忘れてしまった。
「いいえ！　いいえ。私は美よりも力が欲しいのです」
「力？」
「貧しい人々は医者や食べ物を待っている。家畜は水場を求めている。それなのに私はこれほどまでに無力で……」
　レオポルドはそっと手を伸ばして女の頬に触れた。彼女ははっとして、我を忘れたことを恥じた。
「そなたは余に似ている。余も王太子の時代に同じいらだちを感じていた。今も、したいことが全て出来るわけではないが、志は忘れていない。心配するな。そなたはいずれ女王になり無力ではなくなる」
　彼女は言葉を見つけられずにいた。
「そなたは、もう一人ではない。人々はグランドロンとルーヴランは不倶戴天の敵だという。だが、そなたと余は同じ志を持つ友だ。そうではないか？」
　ラウラは、ショックを受けて震えた。
「陛下……」
「余は、この話を九割がた断るつもりでここに来た。だが、断る前に一度、そなたのことをよく知りたかった。結婚しようと、敵味方に分かれようと、グランドロンとルーヴランは無関係でいられぬ。そなたと余は生涯関わり続ける存在だ。余は、神に感謝したい。ルーヴランを担う世襲王女がそなたであったことを」
　ラウラは心の中で叫んだ。
（違うのです！　私は姫ではありません）

申し込み

「し〜っ。静かに。本当は、まだ私、姫さまの御用で街にいる事になっているんだもの」
「わかっているよ、エレイン。でも、この前に逢ったのは十日も前だぜ。お前、俺に逢いたくなかったかい」
「そりゃ、もちろん、ジャック……」
「じゃあ、どうして、昨日の手紙に返事をくれなかったんだよ。俺、マウロが手紙を持ってきてくれなくて、ものすごくガッカリしたんだぜ。アニーと喧嘩でもしたのか？」
　暗い部屋にはほんの少しの明かりが小さな窓から入ってきていた。城の最下層は半地下になっていて、倉庫や武具、それに飼料などが納められていた。ここには用事のある召使いたちや下級兵たちしかやってこない。ジャックとエレインが勤務中に逢い引きをすることはもちろん認められていなかったので、仲間の誰にも見られないように周りを氣にせねばならなかった。二人はお互いの親友であるマウロとアニー兄妹の協力を得てわずかな逢瀬をもっていた。
「違うの。マウロにあなたが預けてくれたあの手紙ね。アニーは昨日からなんとか私に渡そうとしてくれたんだけれど、それどころじゃなくて」
「何があったんだい」
「驚かないでね。グランドロンの王様から正式に姫さまに結婚の申し込みがあったのよ」
「なんだ、そのことなら、こっちでも聞いていたよ」
「あら、だったらわかるでしょう。私たちがどんなに慌てたか。どうして宰相さまは早くお断りしなかったのかしら」
「何の問題があるんだい？　このご縁談は前から進んでいたじゃないか。そのつもりでティオフィロス先生に来てもらったんじゃないか。この間グランドロンの王様が来た時も、姫さまと上手くいきそうだったらしいし」
　エレインはそっとジャックの耳に口を寄せた。
「あれは姫さまじゃなかったのよ。あの姫さまに王様を満足させるような応対がおできになるわけないでしょう？」
　ジャックはびっくりして暗闇の中でよく見えもしない可愛い恋人の表情を読もうとした。
「じゃ、グランドロンの王様と踊っていたのは……」
「ラウラさまだったの。お断りするからバレないって話だったのに……」
「なんでそんな事をしたんだ？」
「姫さまに会ったら、断られるに決まっているじゃない。会って断られたなんて、姫さまの名誉に傷つくわ。だから、まずはそこそこ氣にいってもらえるようにして、こちらから内々に断るってはずだったのよ！　でも、正式に申し込まれてしまってから断ったら今度はあちらの名誉に関わってくるじゃない。それで、いったいどういう事なんだって、昨日は大騒ぎだったの。だから、アニーと私の二人きりになる機会が全然なかったの」
「おかしいな、ザッカさまも国王陛下も、そんなに慌てているようには見えなかったんだが」
「そうなの？　どうするおつもりなのかしら」

それから数日経って、マリア＝フェリシア姫がこの婚儀に正式に合意した事が発表された。王太女である姫がグランドロン王の婚姻を結ぶ事は、すなわち二つの王国が次の代には一人の国王によって治められる事を意味していたので、大きな驚きが内外に広がった。既に長い事水面下で調整されていたため直ちに婚儀の日程が決定され、わずか一ヶ月後に姫はグランドロンへと向かい、到着後一週間待ってから婚姻の儀が執り行われる事となった。父親である国王エクトール二世は姫に堂々たる様子で祝福を伝え、姫は艶やかに笑ってそれを受けた。

事情を知っているわずかな人間は、この楽観が全く理解できず、一体どうなる事かと眉をひそめた。

「だって、そうでしょう。ラウラ、あなたはレオポルド陛下とかなりたくさんお話をしたように見えたのだけれど……」

宮廷奥総取締のベルモント夫人は不安そうに言った。

「はい。とにかく断られる口実を作らないようにと言われましたので、グランドロン語で……」

「それでは、向こうについた一日目には、もうわかってしまうと思うのだけれど」

ラウラは否定しなかった。

国王も姫もそれで構わないと思っているように見えた。あの時、断るからと言ったはずのザッカまでもがその事にはまったく憂慮しているようには見えなかった。

ラウラはレオポルド二世の事を考えた。あの時、同じ志を持つ友だと言ってくれた彼は姫と結婚してどう思うのだろう。こんなはずではなかったと思うのだろうか。それとも、ルーヴランが手に入ればそれでいいと思うのだろうか。

ラウラの心の半分はその憂慮を離れて突然降って湧いた一ヶ月後の自由に喜び踊っていた。一ヶ月後にマックス・ティオフィロスが新天地を求めて旅立つのと時を同じくして、彼女は自由になれる。もう二度と姫の代りに打据えられる事もなくなる。どこへ行き何をするのか、全て自分で決定できるようになる。

ラウラはバギュ・グリ侯爵に自由を願い出るつもりだった。養女とは言え、一度たりとも父親らしく家に迎えてくれた事もなければ、実の娘のエリザベスに届けていたような贈り物も受け取った事がない。それどころか優しい言葉を聞いた事もなかった。鞭で打たれるためだけに存在した娘なら、役割が終わった時に再び肉屋の孤児に戻してくれるように頼んでも構わないだろうと思った。

ここを出て行きたい。それだけがかつてのラウラの願いだった。姫のいない所であればどこでもよかった。どこかの宮廷や高位の者の家庭にて、穏やかに暮らせればそれでいいと思っていた。けれど、今はもう一つの願いを持っている。マックスに再び逢える街に行きたい。街で出会い、再び話をする事のできる場所に行きたい。たとえ想いは届かなくても、ただその姿を見る事の出来る所に行きたい。

旅籠『カササギの尾』でマウロやジャックと一緒に楽しく寛ぐマックスの話を、マウロの妹である侍女のアニーから聞いて、ラウラはそこに自分が行くことを夢想していた。そこは、もともとラウラの属していた世界だ。だから、彼女はそこに戻りたいと願っていた。どこかの宮廷で紳士や貴婦人に堅苦しい作法や文学を教えるマックスが、帰って来てリラックスできる場所。彼女が行きたいと願っていたのはそ

んな場所、この世のあらゆる場所にあるもう一つの『カササギの尾』だった。
だが、そのためにはどうしてもバギュ・グリ侯爵令嬢の名前を取り除いてもらわねばならなかった。ラウラは王女の輿入れが終わるまで、一切の汚点を残さず、王家や侯爵の機嫌を損ねぬよう慎重に行動するつもりだった。

マックスにとっては、この話が決まったことはさほど驚くようなことではなかった。そもそも、婚姻の話があったからこその仕事だった。それに、彼はラウラと国王レオポルドが会話をしたのは、公式の場だけだと思っていて、あの夜に二人がバルコニーで出逢い語り合ったことを知らなかった。だから、あの時広間にいたのが姫ではなかったことは隠し通せるかもしれないと思っていた。だが、もちろん、レオポルド二世に対する同情の氣持はあった。あの王女を妻にするなんて、ぞっとする。
だが、いずれにしてもこの話は彼にとっては人ごとだった。彼の頭を占めていたのは、次の行き先だった。マリア＝フェリシア姫に対する教育の成果は、彼の基準ではまったくもって情けないものだったが、ルーヴラン国王エクトール二世も宰相ザッカも彼に対して不満を漏らすことはなかった。それどころかグランドロンからの正式な申し込みがあった途端、ザッカはマックスを呼び出して契約よりもかなり多い報酬と、彼が待ち望んでいた証書を手渡してくれたのである。
「まだ、一ヶ月ございますが」
「もちろん、婚儀の行列がこのルーヴランを去る前の日まで、引き続き殿下の教育はお願いしたい。だが、国王陛下はこの婚儀が無事に決まったことをお喜びなのだ。なんといっても、わずか二ヶ月で全くグランドロン語を話せなかった状態からレオポルド二世陛下と会話が成立するほどにしていただいたのだから」
マックスは「それはバギュ・グリ殿の功績でしょう」と言いたかったが、この際、黙っておくことにした。下手にラウラの功績をたたえれば、彼らはラウラを引き立てようとするかもしれない。だが、あの娘はこの城から出て行きたいのだ。

「時に、ティオフィロス殿。不躾で申し訳ないが、次の仕事はもうお決まりか」
ザッカは慎重に口を切った。マックスは証書をたたんでしまいながら、宰相の顔を見た。
「いいえ、まだ。ゆっくりと次の勤め先を探しつつ、グランドロンの方へ戻ろうかと考えておりましたが。何か？」
ザッカは顎髭をしごきながら言った。
「うむ。実はだな、たまたまヴォワーズ大司教から優秀な教師を知らないかと問い合わせがあったので、貴殿のことを報せようかと思ったのだ」
「そうですか。センヴリのマンツォーニ公爵のご子息をお教えした時に、ヴォワーズ大司教と大修道院の噂を耳にしました。有名な蔵書の数々を拝見したいとかねがね願っておりましたので、お近づきになれれば幸いです」
ザッカは満足そうに頷いた。

「では、一ヶ月後に、大司教様あての推薦状をお渡しすることにしよう。よければ、そのままセンヴリへと向かっていただけるとありがたい」
「ありがとうございます。では、そういたしましょう」

告知

一ヶ月は飛ぶように通り過ぎた。ラウラは幸せなひとときを過ごした。マックスはまもなく輿入れする王女のために熱心に登城して嫌がる王女のご機嫌を取りつつも以前より多くの授業をした。そして、ラウラの課題ので出来をはっきりと賞賛した。彼女は授業のあと、王女がさっさと去ってしまった後に、マックスを呼び止めてグランドロンやセンヴリの地理や歴史について質問をした。するとマックスはとても熱心に、優しく答えてくれた。それどころか時おり授業のない午後にも城に残り、一緒に例の白薔薇の苑を散策することがあった。

最期の授業を終えた日も、二人は白薔薇の苑を散策した。陽射しは強く、夏らしくなっていた。一重の花びらはどれも大きくひらき、芳香で満ちていた。

「先生は……このお仕事が終わったらどこへ向かわれるのですか」

ラウラは自分の声の緊張が伝わらなければいいと願った。マックスはだが、そのラウラの質問の意図を感じ取った。彼女の手を取り自分の方へ引き寄せたい強い衝動をおぼえた。けれど彼はぎゅっと拳を握りしめた。

想いを打ち明けた所でどうなるというのだろう。街の場慣れした娘たちとは違うのだ。ひどい仕打ちに一人耐え、優しさに飢えている純真な娘だ。甘い言葉を囁けば、はるかに大きな期待を持たせることになってしまう。

生まれがどうであれ、ラウラは城の中で育った人間だった。柔らかい羽布団と、高級な絹の間で。マックスが出会ってきた地を這ってい

る貧しい人たちとは違う。旅籠で春をひさいで暮らしていたマリエラ、蕪と青菜の薄いスープしか食べられないジャコ夫妻、旅人に毒を盛って金品を巻き上げていた粉屋の夫婦、肉など何ヶ月も口にしていない『カササギの尾』の常連たち。マックスが旅で身を置くのはそういう世界だ。駄目だ。この人は世界の違う貴婦人なのだ。

「宰相殿のおすすめでヴォワーズに参ります。大修道院で貴重な書籍を拝見するのが楽しみです」

ヴォワーズ大修道院は厳格なことで知られ、使役や下働きの者に至るまで男性だけで有名だった。大司教座の周りには城下町に近い空間があったが、特別な許可がない限り修道院への出入りはできない。

ラウラは「そうですね」と相槌を打つことしか出来なかった。マックスが続けて言った「あなたのような優秀な生徒がまたいるといいのですが」という言葉に打ちのめされていた。自分は生徒に過ぎないと言葉通りに受け取ったので。もし、彼女がその時に彼の表情を見ていたならば、彼の意図は言葉とは違ったことを読みとれたであろう。

＊　＊　＊

姫が旅立つ前の日、マックスは大広間に正式の別れの挨拶にやってきた。国王とマリア＝フェリシア姫に対して、良縁に対する技巧の限りを尽くした祝辞を述べ、堂々たる様子で深い礼をした。彼は瞳の端で、王女の後ろに控えているラウラが強い想いと願いを込めて自分の方を見ているのを感じ取った。

だが彼はラウラには話しかけなかった。バギュ・グリ侯爵の方を向き、令嬢への儀礼的な賞賛を述べた上で、二人の令嬢の今後の幸せを祈るという、非個人的な祝辞を付け加えた。ラウラが傷ついて青ざめているのがわかった。マックスは「この方がいいんだ」と自分に言い聞かせた。次回はもっと身の丈にあった女性に惹かれるといいんだが、そう思いながら。

打ちのめされて広間から出たラウラは、上機嫌の姫に従って、孔雀の間へと移動した。廷臣や衛兵たちの集う堅苦しい謁見が終わったので、姫の取り巻きの女官たちも大きな声で私語をはじめ、準備されている大きな宝石のついた長持ちや美しい贈り物の数々について語り合った。

バギュ・グリ侯爵令嬢、つまりラウラの養父の実の娘である女官エリザベスが言った。

「姫さまが明日からいなくなるなんて、寂しくて耐えられませんわ」

するとマリア＝フェリシア姫はけたけたと笑った。

「心配しないで。私はいなくならないから」

「まあ、姫様、なぜそんな事をおっしゃるんですか？」

侍女のエレインはは謁見に使われたマントを丁寧に畳みながら訊いた。

姫は窓の外を眺めているラウラを扇子で示した。

「行くのは彼女よ」

皆の視線が急に自分に集中したのを感じて、ラウラは視線を部屋に戻した。王女が何を言っているのか理解できなかった。

「ふふふ。ザッカははじめからそのつもりだったのよ。だからあの王が来た時に、ラウラに私のふりをさせたんだわ」
　王女の取り巻きの女官たち、侍女たちも姫が何を言っているか、よく理解できなかった。
「大丈夫よ。結婚式までヴェールを外さず、花婿に顔を見せないってことだけは、あの傲慢な王に納得させたんだもの。違う人間が行ってもわかりゃしないわ」
「でも、姫様！　結婚したらすぐにわかってしまうじゃないですか」
エレインはいい募った。

「結婚する事などないのだ」
突然、ザッカの声が聞こえたので、一同は戸口に目を移した。ザッカが兵士の一団と一緒に立っていた。
「バギュ・グリ殿。誠に申し訳ないが、私と一緒に来ていただこう」
ラウラは言葉もなく立ち尽くした。マリア＝フェリシアはけたたましく笑った。
　ザッカも兵士たちも手荒な真似は一切しなかった。けれどその有無をいわさぬ威圧感にラウラは怯えた。彼女は西の塔に連れて行かれた。同行して世話をする事を許されたのはアニー一人だった。
「いずれにしてもアニー殿にもバギュ・グリ殿と同じ運命を担ってもらわねばならぬ。危険はわずかに少ないとは言え」
　彼女はきちんとした調度はあっても、あかりとりの小さな窓しかない、牢獄のような空間を見回してから、不安そうにザッカに言った。
「これはどういうことなのか、お伺いしても構いませんか」
「もちろんです。バギュ・グリ殿。あなたには理解して納得してもらわねばならない。我が国の命運が、今あなたのその肩にかかっているのです」
　ザッカは真剣な目で語りかけた。
「憶えていらっしゃいますか、あの貧民街に行ったあの日、あなたはこうおっしゃった。『この人たちを救う事が出来るならば何でもする』と……」
　ラウラは頷いた。その氣持ちに偽りはなく、今でも変わっていなかった。
「あの時、私はあなたに賭ける事にしたのですよ。私の計画はご存知でしょう」
「グランドロン王国から失われたルーヴラン領とフルーヴルーウー伯爵領を奪回すると……」
《氷の宰相》は深く頷いた。
「そうです。だが、グランドロンの軍事力は我々よりも強い。当たり前の戦争をしても勝つ事は出来ない。我々は奇襲をかけねばならぬのです」
「奇襲？」
「そう、グランドロンに普段のような王城の守りのない特別な祝祭に、花嫁側招待客の行列を隠れ蓑に王都ヴェルドンまで入り込んだルーヴランとセンヴリの連合軍が一氣に攻め込むのです。レオポルド二世には軍を配置する時間すらない。自分の婚礼の真っ最中とあってはね」
「それで、姫ではなく私を……」
ラウラは青ざめてつぶやいた。アニーが叫んだ。

「でも、そんなことをしたら、ラウラ様は！」
「そう、花嫁は危険にさらされる。それをわかっていて、この国のために婚礼の瞬間まで持ちこたえる事が出来るのは、あなたしかいません。そうでしょう、バギュ・グリ殿？」

ラウラは恐ろしさに震えた。そのような陰謀に加担する事が、重要な役目を担って敵地に赴く事が出来るとは思えなかった。
「お約束します。我々が攻め入って、一番にする事は、あなたとアニー殿を救い出す努力だと。それでも、あなたにはずっと危険がつきまとう。婚礼までの一週間に、もし本物の王女でない事が露見したら、その時点であなたは処刑されるでしょう。それを覚悟で、どうしてもあなたに行ってもらわねばならない。我が国の悲惨な状況をダイナミックに改善するには、これしか方法はないのです」
たとえ、ザッカの約束が嘘でないにしても、助けが来るまで生きていられる事はないであろう。彼女は他人事のごとく思った。
「私が、嫌と言ったら？」
ラウラは静かに訊いた。ザッカはひるんだ様子もなく答えた。
「あなたは嫌とはおっしゃらない。あの哀れなミリアムの屍をあなたはその目で見たのだから」
「もし露見したらどうなるのですか」
「怒り狂ったレオポルド二世があなた方を殺して攻めてくるでしょうな。感情を持たぬ冷たい兵士たちによって、国中にあのミリアムのような悲惨な死を待つ貧民たちが溢れることでしょう」
「あの方がそのように残虐なことをするとは思えません」
ラウラは青ざめて言った。ザッカは笑った。
「これはこれは。ダンスを踊って社交辞令を耳にしただけで、人格者と判断されるのですか。忘れているようですが、あの王と我々は既に戦争をしてる。ペイ・ノードを守ろうとしたわが国の兵士たちが血を流して死んでいったことをお忘れですか」
ラウラは黙ってうつむいた。ザッカのいう通りだ。それから顔をあげて、アニーの方を見ながらザッカに言った。
「この若く将来のある娘を巻き込むのはおやめください。犠牲になるのは私一人で十分です」
「そういうわけには参りません。姫がご自身で着替えをすることはない。そしてあなたにはグランドロンの侍女には絶対に見られてはならない左腕の傷がある」
彼女はザッカの方を睨んだ。
「では、傷のない者が身代わりになればいいでしょう！」
「バギュ・グリ殿。あなたにはわかっているはずだ。この役目が出来るのはあなた一人だ。グランドロン王が、花嫁として迎えたいと願ったのは、あなたなのだから」
それからすこし取りなすように言った。
「アニー殿は婚儀の時にはもうお近くにはいません。この娘は賢い。自分で安全が確認されるまで隠れている事も、場外に逃げる事も可能だ。あなたが心を配らなくてはならないのは、何としてでも婚儀までは偽物とグランドロン側に氣づかせない事だ」
ザッカはゆっくりと近づいてきた。それからラウラの目をまともに見て言った。

「あなたは、真の貴婦人だ。生まれや年齢や位には関係なく。それは立ち居振る舞いや優しい心だけの話ではない。勇氣の問題なのだ。私があなたに追わせようとしているのは、どの修行僧でも屈強な兵士でも怖じけづくほどの重い十字架だ。私はそれをわかっている。だが、どうしてもあなたにしか出来ぬ事なのだ。この国の惨状を見て同じ無力さに苦しんだ同志として、あなたにこの国のすべてを託したい。どうかこの十字架を受けていただきたい」

それから、踵を返し戸口に行くと、兵士たちに命令を下した。

「今夜は、誰一人といえども、この西の塔に近づけてはならぬ。国王陛下であろうと、誰であろうとだ。この部屋に出入りできるのは、アニー殿一人だ。バギュ・グリ殿のお世話は彼女がする、いいな」

重い扉が閉じられて、彼らが階段を下りて去って行く音が消えると、ラウラは力を失って長椅子に沈み込んだ。

「ラウラ様！」

アニーが涙ながらに膝まづいてきた。

ラウラは侍女の頬の涙を拭ってやりながら言った。

「許しておくれ。お前を危険から救ってあげる事が出来なくて」

「何をおっしゃるのです。自分だけ逃れて、ラウラ様を一人で行かせて、それで私が幸せだと？　それにしてもひどい。私たちは平民だから、たとえ命を落としても誰も文句が言えないと思っているのですわ」

ラウラは微笑んだ。それから深くため息をついた。

「明日になれば、自由にこの城から出て行けると思っていたのに……」

子供の頃から、ずっと夢みて憧れていた《シルヴァ》。あの森を通って、どこか知らない土地へと自由に旅していけるはずだった。国から国へ。街から街へ。マックスが行く所を目指し、その街の『カササギの尾』のような旅籠で働きたいと夢みていた。ただ時おり、食事に立ち寄る彼と言葉を交わすために。

思慕が、どっと押し寄せてきた。あんな遠くから、わずかにお声を聞くだけのお別れになってしまった。いつかまたお会いしたいから、ヴォワーズの次の行き先を教えていただきたい、その質問をする事すら出来ずに。明日自由になったら、一番最初にしようと思っていた事。その下宿を探し出して、氣持ちを伝える事。

優しい雨

ザッカは鐘楼の下の秘密の扉を開けた。牛脂灯の光でゆっくりと扉の内側を照らすと、そこにあるはずの濃紺の外套の代わりに、白い絹の部屋着が吊ってあった。炎が揺れた。しばらくそこに立ちすくみ、考えをまとめようとした。

ザッカは音がしないように扉を閉めて、広間には戻らず西の塔に向かった。半刻ごとに異常がないか見て回る衛兵は、自分の仕事がきちんとなされていることを誇るかのように胸を張って敬礼してみせた。

「異常はありませぬ。私は食事のとき以外はずっとここにおります。バギュ・グリ殿はずっと祈られていらっしゃいます」

ザッカは黙って頷くと、塔を登っていった。階段に靴音が硬く冷たく響く。確かに女の祈りの声が響いてくる。ラウラの声に聴こえない事もないが、ザッカはそれを信じなかった。

扉の前に立つと、小さくノックをする。女の声は止み、沈黙が訪れる。長い、不自然な時間。だが、やがて、ゆっくりとほんの少しだけ扉が開かれる。アニーの顔が牛脂灯の光でわずかに浮かび上がる。

「何事でございますか、宰相殿」

「バギュ・グリ殿にお変わりはないか」

「ございません」

きっぱりとしたアニーの声は挑むようだった。

「その……。バギュ・グリ殿が平静を保たれておられるか、心配になってな」

ザッカが髭をしごきながら見据えたので、アニーの目には少し戸惑いが浮かんだ。震え、青ざめている。《氷の宰相》は、自分はどんな顔をしているのだろうかと考えた。短い沈黙を破るように、アニーは早口に続けた。

「今夜は、どなたであろうとも、ラウラ様にお取り次ぎしてはならぬと厳命を受けております。たとえ、姫様であろうと、国王陛下であろうとです。宰相殿が一番よくご存知ではありませんか」

「そうだ。よく知っている。バギュ・グリ殿にお伝えくだされ。あなたの勇氣と犠牲に感謝していると」

もし、伝える事が出来るならば。踵を返し、塔の階段を降りていきながら、ザッカはつぶやいた。

このままあの女が戻らなかったなら何が起こるのだろう。計画は中止だ。グランドロンと戦をして勝てるチャンスはもうないだろう。だが、なんとグランドロン側に伝えればいいのだろう。花嫁は行きませんと？　明日の昼には花嫁の行列に付き添うグランドロンからの護衛部隊も到着する。その時に花嫁の準備が済んでいなければ、あちらはすぐに疑念を持つだろう。そして、さほど遠くないうちにグランドロンは氣づくだろう。あの日会わせた女が王太女ではなかったことに。我々の策略に。そうなった時のための準備をしなくてはならぬのか。

頼みの綱はただ一つだ。あの娘が身代わりとなった侍女を犠牲にするような性格ではないという私の読みがあたること。もし、そうでなければ……。

ザッカは自嘲した。これほど綿密に立てた計画すべてが、女の慈悲心一つにかかっているとはな。あの娘には何もかも捨てて逃げるだけ

の理由がある。あの聡明な女にわからぬはずはない、捨て石にされて残酷な死に向かわされる事を。
　私は神に祈ったりはしない。ザッカは立ち止まって小さな窓から空を見上げた。先程までの明るい月は、暗い雲にかき消されている。広間の方から人々のざわめきが聴こえる。王女の輿入れ前夜の宴だ。軽薄な赤毛の姫が騒いでいる声も耳に届く。何が起こるかも知らずに。
　神は、私の思惑を超えて駒を進める。だが、明日の朝まで、騒ぎは起こすまい。逃げたければ逃げよ。そうなった時には、私は全てを負わねばならぬな。ザッカは心の揺らめきを悟られぬよう、いかめしい顔をして広間に入っていった。

＊　＊　＊

　ラウラはその頃、秘密の地下道を通り抜けて、城下に入っていた。この通路を知らなければ諦めたに違いない。誰かに見つかる危険を想定しないわけにはいかなかった。みつかればアニーもただでは済まない。私のわがままを、あの子は黙って許してくれた。賢い優しい子。あの子に出会えた事を感謝しなくてはならない。
　かき曇る空を見上げた。ぽつりぽつりと雨が外套にかかる。彼女は目を閉じた。狂っているのかもしれない。それでもいい。躊躇している時間はないのだ。二十年。一度も自分の命を生きてこなかった。明日は再び姫の影に戻る。そして、二週間で全てが終わる。自由になる事もない。だから、せめて一度だけ、本当に自分のしたかった事をさせてほしい。報われなくてもいい、どのように罰されてもいい、どうしてもあの方に逢いたい。
　サン・マルティヌス広場への道も、先日ザッカと通ったので探し立ち止まる必要もなかった。旅籠『カササギの尾』は、すぐに見つかった。その脇の小路を進むと、いくつもの同じような家が並んでいた。アニーから伝え聞いたマウロの話では、マックスは一番奥の建物を借りているということだった。そこは窓の鎧戸も扉も閉ざされていた。ラウラは少し躊躇したが、扉をノックした。最初は小さく、答えがないのでやがて大きく。しばらくすると二軒先の建物から、年配の女性が顔を出して叫んだ。
「ティオフィロスさんなら昼から出かけているよ！」
　雨が次第に強くなってきた。冷たい風が追い討ちをかける。結局、そういうことなのだ。期待をしてはいけないと、自分に言い聞かせてきたつもりなのに。一目逢えれば、それでよかったのに、それすらも叶わないのだ。ラウラは扉にもたれかかって肩をふるわせた。
「《黄金の貴婦人》……？」
低い声が聞こえて、彼女は振り向いた。雨が視界を遮り、立っている茶色いマントの男がマックス・ティオフィロスだと判断するのは難しかった。だが、その声は紛れもなかった。
「バギュ・グリ殿！」
先生……。彼女のつぶやきは音にならなかった。
「どうして、ここに？　寒いだろう。すぐ中に」
　彼は急いで戸を開けてラウラを中に誘った。マントを脱ぎ捨てるように戸口に掛けると、玄関に置かれた薪の山から数本を取って居間の

暖炉にくべると、衰えていた残り火に息を吹き込んで熾らせた。
「マントをここにかけなさい。そんなに濡れて、風邪をひく。ここに来て暖まってください」
そして振り向いて、はじめてラウラの青ざめた様相に目を留めた。彼女は視線を足下に落として、寄る辺なく立っていた。そして、声を絞り出した。
「申し訳ありません」
「なぜ謝る?」

マックスは戸惑っていた。雨の中に立つマント姿の女を《黄金の貴婦人》と見間違えたことを、自分で理解が出来なかった。子供の頃に数度見た貴婦人は、今ラウラが着ている粗末な服地ではなく、漆黒のしかし一目でわかる最高級の絹で出来た服に身を包んでいた。そして、もちろん一人で雨の中を歩くなどということはなかった。
王宮でラウラを《黄金の貴婦人》と見間違えたことも一度もなかった。だが、先程のラウラの佇まいは彼を十歳の子供に引き戻した。それは深い悲しみのにじみ出た後ろ姿だった。

「どうしてもお逢いして、ひと言お別れを申し上げたかったのです。先ほどはお話しすることもかないませんでしたから」
彼女は足下をみつめたままで、いたずらを見つかってしょげている小さな子供のようだった。
「よく無事で来られた。供も連れずに一人でこのような所に来るのはあなたのような貴婦人のなさることではありませんね」
笑ってそう言ったマックスの言葉に、ラウラは目に涙を浮かべた。彼ははっとした。
「私は貴婦人になりたかったわけではありません。肉屋の孤児なら氣軽に逢ってくださるというならそうありたかったと思います。先生の後を追って遠くの国へ行きとうございました。遠くからでもお姿を見ていたかった。でも、私の想いを迷惑と思われているのは、今朝の先生のご様子でわかりました。神もそれを望まれていませんでした。だからこそ、生涯の思い出にせめてただひと度お逢いしたかったのです。それすらも許されないのでしょうか」
マックスはラウラの頬を伝う涙に手を添えた。
「許してください。あなたを苦しめるつもりではなかったのです。迷惑だなんてとんでもない。私もあなたに惹かれています。昨日もそう伝えようかと迷ったのです。でも、あなたは私の旅してまわるような賤しい世界に属する人ではない。だから何も告げずに別れるのが一番だと思ったのです」
「先生……」
「マックスと呼んでくれませんか、ラウラ……」
そういって彼は震える女をそっと抱き寄せた。彼女はもっと激しく泣き出した。その髪を梳きながらマックスは思った。自由氣ままな旅もこれで終わりになるかもしれない。
「明日、行列が去ってから、もう一度お城へ行きます。侯爵様のお許しが簡単に得られるとは思えないが、努力してみましょう」
ラウラはそっと顔を上げた。明日、行列が去った後に城に行っても彼は彼女に会うことは出来ない。だから、逢いにきてよかったのだ。

「いいえ。いいえ。どうかこれまでのように自由に生きてください。私にはそのお言葉だけで十分ですから」
「何も言わなくていい」
マックスの顔が近づいてきた。彼女は一夜の夢を見るために瞳を閉じた。

（初出　二〇一四年十二月　書き下ろし）